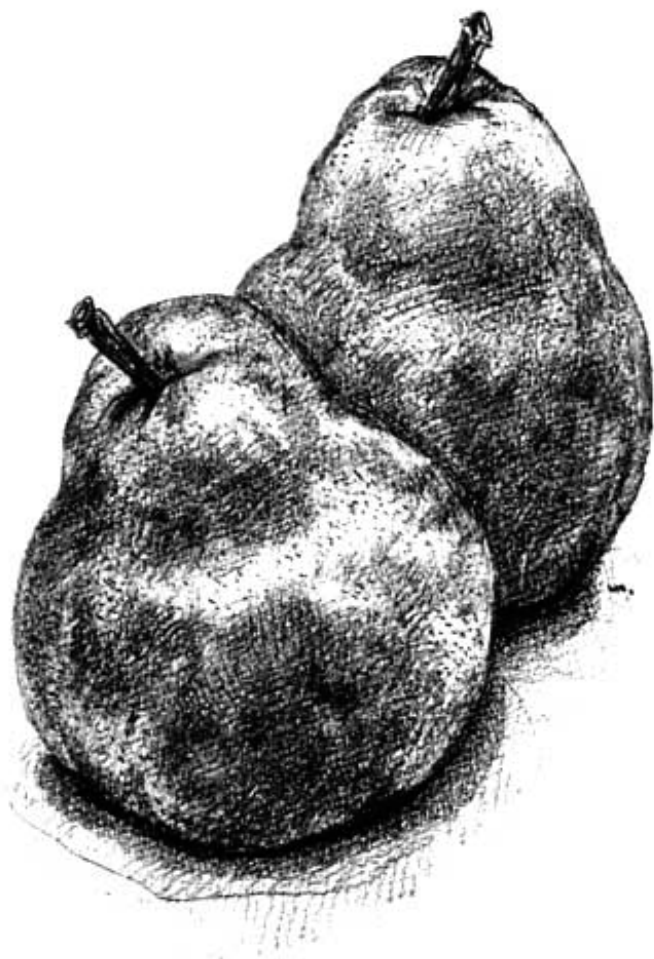


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成22年6月5日発行(毎月5日1回発行)
第50巻6月号(通巻611号)

風土



6

さくら散る

神蔵

器

天上の花の茶会に招かれて

退院の仏にかけて春シヨール

花吹雪泪に馴るることのなし

念珠よりさくらの花のこぼれけり

さくら散る四十年も一期一会

眼冷ゆ窓にもつとも近き竹
する墨の香りにむせて花の冷え
群青の四月九日忌日とす
喪に服す熊谷草の月の母衣
水底に日輪もゆる竹の秋
扁額に拈華微笑や辛夷咲く
満月の澎湃として峰さくら



竹間集

同人作品



永き月

塩田 博久

永き日の図書館にわが指定席
亀鳴くや人待ち顔の検索機
花冷えや書庫にへッセの初版本
隣席の春眠うつり来つつあり
書に倦みし眼を和まする遠桜
ドリンクをかたへに四月の受験生
春夕ベブツクポストに本落とす

行く春

代田 青鳥

花の雨うだつの町に小半日
衿立てて共同墓地の花吹雪
行く春や坂上にある駐在所
一人用の俎板干して春惜しむ
啓蟄の弾んでをりしゴムボール
仏壇の菜飯まつすぐ湯気あげて
春光へテニスボールを打ち返す

白子

関根 洋子

こぼれぬし白子に眼ありにけり
雫して浜の値段の栄螺かな
野良猫に取らる濡れ縁春の月
灯台も春の灯しとなりにけり
正四位竜馬の妻に紫木蓮
はるかなる四島鯨曇かな
別荘の名残の町や鳥帰る

初 蝶

田中佐知子

初花や高からずして吉野門
迷ひの窓悟りの窓の春の風
初蝶の光をこぼす光悦垣
鷹ヶ峰三山まるき日永かな
いくつもの別れありけり青き踏む
春風や善悪模糊と二面石
晩年はいづこに在りや鱷追ふ

雛の間

工藤ミネ子

虫出しの雷の聞こえぬ夫の背な
雪掘つて軒を身軽に大藁屋
山笑ふ山影山に立て掛けて
雛の間嬰を抱かせてもらひけり
児を抱きし記憶が腕に雛の間
ことのはをつなぐ帰心の鶺鴒どち
かんばせを平らに鶺鴒送りけり

春夕焼

柴田 久子

初つばめ明日訪ふ町の地図開く
生も死も一字なりしよ春夕焼
受験子のてのひら熱く戻りけり
飢ゑ知らぬ子が採り来たる蕨かな
草青む土手は大きなすべり台
芹を摘む一番低き風の中
絵画展へひと駆歩くチューリップ

鳥帰る

中村 洋子

天空の奥へ奥へと鳥帰る
三月の水族館のイルカショー
手囲ひで育つ香の火彼岸寺
三月の地に縄張りの陶器市
陽炎の中より現れて修道女
若き日の母の一句や雛の間
芽柳の裾を潜りて舟下り

初 燕

— 宮川みね子 —

山彦の目覚めはじめし木の芽風
赤松の亀甲ぬらす春の雪
竹林の風遅れくる涅槃寺
神と仰ぎし一山笑ひそめにけり
三月や透明定期二本立て
鉛筆の芯折れやすし鳥の恋
辛夷咲く筆こまやかに絵付して
み仏の視線のなかに花あしび
はるかよりひかりとなりて初燕
白蓮や美術書にある恋仏

山河集

同人作品



神蔵器選

三郎は 大器 晩成 鳥 帰る
古川よし子

入母屋の名主の家の花菜漬
対岸のドックに巨船鳥帰る
子雀の餌を食みては首傾げ
志あるかに地虫出でしかな

卒業生全員スピーチ三十秒
館 秦生

芹摘みし上総の谷戸の暇道
冬灯腰越状に目をこらす
曾我の里とろとろ歩く日永かな
逃水や相武国境近く住む

ひらがなの絵本よめるよ桃の花
森田 節子

ロボットにまかす掃除や目借時
春昼の木戸銭寺に落語かな

消印も切手も一葉春ともし
残り香の喪服を吊るや春障子

絵画展出でて桜を仰ぎけり
須藤美智子

二人してベンチに座せば亀鳴けり
陽炎を抜けて明日を見に行かむ
等伯の屏風の柳木の芽時
町中の一樹膨らみ囀れり

二上の山より暮るる牡丹の芽
雨宮 桂子

草萌や朱雀門より槌の音
春しぐれ幾曲がりして曼茶羅図
恋猫や庫裡にひとりの坊の妻
巡礼の村や菜の花蝶と化す

◇特別作品◇(抄)

蒼き風

落合 絹代

鳥雲に安房へ航路となりにけり
小半刻まつ単線や駅うらら
雛罌粟に虹色の風立ちにけり
鶯や回廊崖にせり出して
落椿十一面さまへ詣でたり
山笑ふ崖観音に椅子一つ
巡礼に伊予の訛や蓬餅
坂東の結願寺かな花の雲
よく笑ふ船頭囲む春炉かな
大海の蒼き風吹く罌粟の花

風土独語／神蔵 器



鶏頭を蒔く踏みたる影のうち

中根 美保

鶏頭は前年の落ちた種子から自然に生えるが、毎年、別に蒔くことが多い。これはないしょの話だが、子規庵の庭を散策している時、径の方へ傾いた鶏頭にちよつと触れると、つやのある黒い小さな種子がほろほろと掌にこぼれ落ちた。

さて、作者は勿論子規庵のものではないが、春になって庭の片隅か植木鉢に鶏頭の種子を蒔こうとしている。彼岸の明けた頃であたたかい日である。「踏みたる影のうち」は作者自身の描写であるが、誰もが体験していることに新鮮な感動を受けた。

何しろ鶏頭の種子はけし粒のように小さいので、風がある無しかかかわらず地面に近く、当然深く踏み込んで蒔かねばならない。「影のうち」は、母がふところに子を抱き慈しむごとくである。

鶏頭の十四五本もありぬべし 子 規
今年の秋にはこんな便りが、子規庵から、否、作者美保さんから来るであろうか。

卒業生全員スピーチ三十秒

館 泰生

おそらく高校の卒業式であろう。私などの時代は答辞は卒業生

の代表が一人で答辞を読んだ。その後「仰げば尊し」を卒業生を中心に先生、父兄、来賓ら全員で合唱して終った。近頃の学校では卒業式にも色々と思考を凝らしているようだが、掲出句の学校では、卒業生全員、一人一人がスピーチをしたのである。しかも一人は僅か三十秒と決められた。ある高校生はいきなり、
ばかやろう！……と叫び、

先生、有り難うございました
と深々と頭を下げた。誰一人泣かない男生徒の中で、この生徒だけがぼろぼろ涙をこぼしていた。

消印も切手も一葉春ともし

森田 節子

一葉が八十円の切手になっていることは、とうから知っていたが、消印にまで使われていることは知らなかった。やむを得ず作者に電話したところ、「実際にあります、本郷局で使われていますよ」ということであった。

本郷局なら本郷六丁目の局であろう。本郷菊坂にも近く、一八九三年下谷龍泉寺に移るまで母や妹とともに洗い張りや針仕事で生活を立てていた一葉の最も苦しい時代を過ごしたところで現在は路地に一葉も使ったという手押しポンプ井戸があるだけである。

一葉の切手はうれしかったが、本郷局だけという消印はせつな
くかなしくなった。(以下略)

風土集



神蔵器選

鶏頭を蒔く踏みたる影のうち 川崎

中根 美保

種袋封書を開くごとひらく

木苺の花まつ先に翳りけり

朝ざくら雨の匂ひを残しけり

春寒や指添へて振る七味筒

こまごまとをみなの仕事春の雪 相模原

奥山 絢子

黄昏る梅ひとひらの香りかな

白をもて十^く字^ろ架^すの如き椿かな

花を尋ねて西行の日なりけり

ほろほろと大きく昇る春の月

春愁家に四隅のありにけり 高槻

浅田 光代

どこまでも平城宮址青き踏む

飛鳥仏すこし泛かせて揚雲雀

遠足の子に象の尻動かざる

春がすみ通天閣へきりんの眼

天日や野に一本の枝垂梅 上尾

根岸 善行

紅梅は暮れ白梅の池明かり

七十歳を過ぎし男女に亀鳴けり

菜の花を和へめひかりを揚げにけり

春の雷近づくでなし去るでなし

寿福寺の雨の一日紅椿 静岡

菅原 末野

帰路いつか一人となりし蓬摘む

鳥帰る諸味の眠る蔵の上

み吉野の木の香しき手彫雛

行く春の水の近江の浮御堂

啓蟄や屋上にある木のベンチ 綾部

堀川多恵子

至福なり友の笑顔と桜餅

携帯電話の明かりに句帳春の闇

グランドを一羽の鷺に春の雨

癌を道連れの旅なり春の雷